

研究報告

アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究
— 3か国によるU-14代表選手の競技力の実態調査から —

Improvements in performance of young Asian soccer players
— Survey of performance level in U-14 selection teams in three countries —

松山 博明¹⁾

関口 潔²⁾

松竹 貴大³⁾

土屋 裕睦⁴⁾

Hiroaki Matsuyama¹⁾ Kiyoshi Sekiguchi²⁾

Takahiro Matsutake³⁾ Hironobu Tsuchiya⁴⁾

Abstract

A survey consisting of Japan Football Association (JFA) physical assessment, and Diagnostic Inventory of Psychological-Competitive Ability for Athletes 3 (DIPCA 3) was conducted to assess performance level of young soccer players in Cambodia, Laos, and Northern Mariana Islands, who were coached by expatriate soccer coaches, in order to investigate their performance. The results indicated that young players in Cambodia had a higher level of agility compared to players in other countries, as assessed by the “shuttle run” and the “agility step 50”, of JFA physical assessment. On the other hand, their kicking power and throw-in skills were relatively low. Moreover, DIPCA 3 indicated that their motivation to win, self-control, confidence, ability to relax and decision-making ability were relatively high. Furthermore, young players in Laos compared to players in other countries were faster as assessed by the 50-meter run, included in JFA physical assessment, as well as in kicking power of the left foot, and jumping ability, including “bounding” and “one-leg hopping”. On the other hand, their “agility forward” was low. However, there were no significant differences in DIPCA 3 scores. Also, young players in Northern Mariana Islands had lower shuttle run and bounding with both legs scores, as indicated by JFA physical assessment. DIPCA 3 indicated that their competitive spirit, motivation to win, decision making ability, and cooperativeness were low.

However, soccer players in the three countries showed lower scores on the JFA physical assessment and DIPCA3, compared to Japanese players. In order to improve their performance, it would be necessary to implement training programs for players in these three countries based on guidance for coaches, and to increase their experience of participating in international games.

キーワード 日本サッカー協会, アジア貢献事業, 育成年代, サッカー

Asian contribution business, Soccer, Upbringing time, training

1) 大阪成蹊大学

Osaka Seikei University

2) 日本サッカー協会

Japan Football Association

3) 筑波大学大学院

Tsukuba university

4) 大阪体育大学

Osaka University of Health and Sport Science

1. はじめに

公益財団法人日本サッカー協会 (Japan Football Association: 以下 JFA とする) は、サッカーを通して子どもたちに明るい未来を与え、アジアサッカーの普及と発展につなげていきたいという理念のもと、アジアサッカー連盟 (Asian Football Confederation: 以下 AFC とする) に加盟している国や地域に対して、さまざまなアジア貢献事業を行っている。こうしたアジアでの共存共栄を目指す事業の一つに、コーチや審判員を養成するための指導者としてチーム審判インストラクターなどを派遣する人的支援・知的支援プログラムがある (JFA, 2013a)。これらの指導者派遣事業では、2015年2月までに、アジア諸国に代表 (ユース年代代表チームを含む) 監督やユース育成指導者を52名のべ24か国のアジア諸国へ派遣してきた (JFA, online)。その中でも、アジア諸国から育成年代を指導する日本の指導者の需要は、2006年以降17か国中12か国であり、急速に増加した (JFA, 2013a)。しかし、これまでアジア貢献事業において派遣された各国のサッカーのレベルは、まだ高いとは言えず、FIFA ランキングによると、すべて100位以下である (FIFA. RANKING, online)。また、それに加えて、コーチング環境などのさまざまな問題、課題を抱えている。選手の心理的な競技力の面では、2012年からチャイニーズ・台北ユース育成統括兼 U-13・18 代表監督に赴任した黒田和生氏によると、指示を待っている、やらされている状態であったと述べている (JFA, 2013b)。更に選手の技術、戦術面においても、2010年からブータン代表監督兼アカデミーヘッドコーチに赴任した松山ら (2014) は、育成年代で技術や戦術面が習得されていなかったと述べている。

これまでに FIFA ランキング別に比較検討を行った先行研究では、海外派遣サッカー指導者の実践活動を基に、育成年代の選手の競技力に関しての調査を行い、FIFA ランキング (上位群・中位群・下位群) 別に比較検討を行った。その結果、指導者による選手の競技力評

価4項目 (技術・戦術・体力・心理) の総合得点の平均値及、標準偏差及び一元配置分散分析においては、ランキング中位群・下位群は上位群に比べ体力得点での「守備での1対1が強い」、「対人プレーで当たり負けはしない」の得点と心理得点での「いつでも、自信をもってプレーしている」の得点が劣っていることが明らかになった (松山ら, 2015a)。また、下位群によるブータン王国サッカー U-19 アジア選手権の実践活動を中心に行った研究 (松山ら, 2015b) や中位群によるカンボジア代表育成年代の約1年にわたるサッカーの実践活動によるトレーニング内容の時間比率を比較検討した研究がある (松山ら, 2016)。これらの研究結果から、FIFA ランキング下位群や中位群のチームは、継続したトレーニングを行っていなかったために、パフォーマンスを向上させる体力面や集中力の欠如、自己コントロールなどの心理面に大きく影響していたことが明らかになった。

これまでアジア貢献事業として日本人指導者が派遣されてきた国の競技力 (技術面、戦術面、体力面、心理面) の実態が明らかにされてきた一方で、まだ十分な競技力に関する報告がなされていない国も存在する。新たに派遣された指導者が選手やチームの実態を把握して支援活動を行うためには、競技力に関する実態が必要不可欠である。

そこで、本研究ではサッカー指導者が派遣されている国の中で、FIFA ランキング中位群によるカンボジア王国 (以下:カンボジアとする) と競技力に関する資料が提供されていない下位群によるラオス人民民主共和国 (以下:ラオスとする)、北マリアナ諸島自治連邦区 (以下:北マリアナ諸島とする) の選手の競技力について、JFA フィジカル測定および心理的競技能力診断検査 (Diagnostic Inventory of Psychological-Competitive Ability for Athletes3: 以下、DIPCA.3 とする;Toyo Physical 社製) の結果をもとに、日本と3か国間の比較などを通して分析を試みる。

2. 研究方法

カンボジア, ラオス, 北マリアナ諸島の選出された直後の U-14 代表チーム選手を対象として JFA フィジカル測定と DIPCA.3 を実施した。

1) 調査対象

JFA アジア貢献事業が指導している 14 歳以下の代表チーム選手を対象として JFA フィジカル測定と DIPCA.3 の調査を実施した。その中から, JFA フィジカル測定は, 測定日に不参加であった選手および怪我などにより, すべての測定が不可能であった選手を除いた。DIPCA.3 は, 得られた回答のうち, 記入漏れおよび誤記入のあったものを除いた。カンボジア (n=15), 平均年齢 14.0 歳 (JFA フィジカル測定の有効回答率 85.0%, DIPCA.3 の有効回答率 85.0%) であった。ラオス (n=17), 平均年齢 14.0 歳 (JFA フィジカル測定の有効回答率 100.0%, DIPCA.3 の有効回答率 100.0%) であった。北マリアナ諸島 (n=14), 平均年齢 13.4 歳 (JFA フィジカル測定の有効回答率 60.9%, DIPCA.3 の有効回答率 66.7%) であった。

調査は, 筆者本人が監督に出向き参加の同意の承諾を得たうえで, JFA フィジカル測定と DIPCA.3 の質問紙の調査の目的などを簡潔に説明し, 筆者が測定・検査結果を郵送とメールで回収した。

2) 調査期間

JFA フィジカル測定と DIPCA.3 の調査をラオスは, 2014 年 3 月 30 日, カンボジアは, 2014 年 4 月 1 日, 北マリアナ諸島は, 2014 年 12 月 14 日に実施した。

3) 調査内容

JFA フィジカル測定に関しては, JFA フィジカル測定ガイドラインに従って実施した。また, 「JFA フィジカル測定ガイドライン」に記載されている測定種目は, サッカーのフィジカル面のあらゆる要素をカバーできるように選択されている。本研究では, その中から海外でも測定可能な 14 種目 (20m 走, 50m 走, シャトルラン, アジリティステップ 50, アジリティ

フォワードラン, ロングキック右足 1 ステップ, ロングキック右足フリー, ロングキック左足 1 ステップ, ロングキック左足フリー, スローイン, バウンディング両足, ホッピング右片足, ホッピング左片足, 12 分間走) から調査を実施した (JFA, 2006)。

DIPCA.3 は, スポーツ選手に必要な試合場面での一般的特性としての心理的競技能力を診断するための心理検査である。スポーツ選手の心理的「特性」としての心理的競技能力を診断する心理検査は, 52 の質問項目から構成されている。また, 競技意欲 (忍耐力, 闘争心, 自己実現意欲, 勝利意欲), 精神の安定・集中 (自己コントロール能力, リラックス能力, 集中力), 自信 (自信, 決断力), 作戦能力 (予測力, 判断力) 及び協調性の 5 因子及び 12 下位尺度に分類される調査法である (徳永ら, 1991)。したがって, 12 下位尺度から調査を実施した。

2.3. 統計処理

本実験において得られた測定値については, 全ての統計には IBM SPSS Statistics 21.0 を使用して一元配置分散分析を行った。さらに, そこ有意差を認められたものについては Bonferroni の多重分析を行った。なお, それらの統計上の有意水準は 5.0% とした。

3. 結果

1) JFA フィジカル測定の分析

日本の 2004 年度フィジカルデータ測定報告 (JFA, 2004) と 3 か国の同年代の平均値と比較した。その結果, カンボジアは日本の同年代の代表チームと比較した場合, 16 種目中一致する 12 種目の中で, 20m, シャトルラン, アジリティステップ 50 の 3 種目において, 高い数値であった。しかしながら, 50m, ロングキック右足 1 ステップ, ロングキック右足フリー, ロングキック左足 1 ステップ, ロングキック左足フリー, スローイン, バウンディング両足, ホッピング右片足, ホッピング左片足の 9 種目において, 低い数値であった。

ラオスは日本の同年代の代表チームと比較した場合, 16 種目中一致する 12 種目の中で,

20m, 50m, バウンディング両足, ホッピング右片足, ホッピング左片足の5種目において、高い数値であった。しかしながら、シャトルラン, アジリティステップ50, ロングキック右足1ステップ, ロングキック右足フリー, ロングキック左足1ステップ, ロングキック左足フリー, スローインの7種目において、低い数値であった。

北マリアナ諸島は日本の同年代の代表チームと比較した場合、すべてにおいて低い数値であった。

また、3か国におけるJFAフィジカル測定14種目の頻度の比較では、50m走, シャトルラン, アジリティステップ50, アジリティフォワードラン, ロングキック右足1ステップ, ロングキック右足フリー, ロングキック左足1ステップ, ロングキック左足フリー, スローイン, バウンディング両足, ホッピング右片足, ホッピング左片足, 12分間走の13種目において主効果が認められた。

カンボジアは、ラオスと比較して、シャトルラン ($F(2.43) = 14.07, p < 0.05$), アジリティステップ50 ($F(2.43) = 19.03, p < 0.05$), アジリティフォワードラン ($F(2.43) = 10.35, p < 0.05$) に有意に高値であった。また、北マリアナ諸島と比較して、シャトルラン ($F(2.43) = 14.07, p < 0.05$), アジリティステップ50 ($F(2.43) = 19.03, p < 0.05$), バウンディング両足 ($F(2.43) = 46.85, p < 0.05$) に有意に高値であった。また、北マリアナ諸島と比較して、シャ

トルラン ($F(2.43) = 14.07, p < 0.05$), アジリティステップ50 ($F(2.43) = 19.03, p < 0.05$), バウンディング両足 ($F(2.43) = 46.85, p < 0.05$) に有意に高値であった。

ラオスは、カンボジアと比較して、50m走 ($F(2.43) = 8.74, p < 0.05$), ロングキック右足1ステップ ($F(2.43) = 11.76, p < 0.05$), ロングキック右足フリー ($F(2.43) = 7.18, p < 0.05$), ロングキック左足1ステップ ($F(2.43) = 14.29, p < 0.05$), ロングキック左足フリー ($F(2.43) = 13.80, p < 0.05$), スローイン ($F(2.43) = 12.66, p < 0.05$), バウンディング両足 ($F(2.43) = 46.85, p < 0.05$), ホッピング右片足 ($F(2.43) = 45.75, p < 0.05$), ホッピング左片足 ($F(2.43) = 40.27, p < 0.05$) に有意に高値であった。また、北マリアナ諸島と比較して、50m走 ($F(2.43) = 8.74, p < 0.05$), シャトルラン ($F(2.43) = 14.07, p < 0.05$), ロングキック左足フリー ($F(2.43) = 13.80, p < 0.05$), バウンディング両足 ($F(2.43) = 46.85, p < 0.05$), ホッピング右片足 ($F(2.43) = 45.75, p < 0.05$), ホッピング左片足 ($F(2.43) = 40.27, p < 0.05$), 12分間走 ($F(2.43) = 5.90, p < 0.05$) に有意に高値であった。

北マリアナ諸島は、カンボジアと比較して、ロングキック右足1ステップ ($F(2.43) = 11.76, p < 0.05$), ロングキック右足フリー ($F(2.43) = 7.18, p < 0.05$), ロングキック左足1ステップ ($F(2.43) = 14.29, p < 0.05$), スローイン ($F(2.43) = 12.66, p < 0.05$) が有意に高値であった。また、ラオス

表1 JFAフィジカル測定分析結果

	(LAO=ラオス・CAM=カンボジア・北マリアナ諸島=MNP)			F値	日本 (n=22)	多重比較結果
	カンボジア (n=15)	ラオス (n=17)	北マリアナ諸島 (n=14)			
20m走	3.25±0.19	3.19±0.11	3.31±0.25	1.71	n.s.	3.30
50m走	7.57±0.49	6.96±0.24	7.34±0.49	8.74	*	7.10
シャトルラン	11.55±0.37	11.91±0.27	12.35±0.56	14.07	*	11.80
アジリティステップ50	15.39±0.93	16.90±0.50	16.69±0.709	19.03	*	15.80
アジリティフォワード	8.08±0.22	8.49±0.28	7.96±0.49	10.35	*	10.35
ロングキック 右足1ステップ	21.53±5.41	29.77±6.08	29.57±4.64	11.76	*	33.60
ロングキック 右足フリー	28.07±6.30	37.32±7.05	36.07±8.65	7.18	*	44.60
ロングキック 左足1ステップ	14.47±3.09	22.98±5.30	20.86±5.09	14.29	*	27.00
ロングキック 左足フリー	21.67±4.56	30.19±4.60	22.50±6.05	13.80	*	37.70
スローイン	11.00±1.61	15.62±1.60	14.50±4.20	12.66	*	15.90
バウンディング両足	5.72±0.32	6.74±0.55	5.16±0.47	46.85	*	6.51
ホッピング右片足	5.20±0.38	6.73±0.64	5.09±0.56	45.75	*	6.32
ホッピング左片足	5.35±0.60	6.87±0.72	5.04±0.48	40.27	*	6.33
12分間走	2375.40±171.88	2602.41±217.76	2419.00±202.84	5.90	*	LAO>MNP

*: $p < 0.05$, n.s.=not significant

【計測日】日本代表「U14」: 2004年7月20日

と比較して、アジリティフォワードラン ($F(2.43) = 10.35, p < 0.05$) に有意に高値であった。

2) DIPCA.3 の分析

大嶽ら (2003) による DIPCA.3 の研究結果と 3 か国の同年代の平均値と比較した。その結果、カンボジアは忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自信、決断力、予測力、判断力、協調性の 12 下位尺度中 9 下位尺度において高い数値であった。しかしながら、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力の 3 下位尺度において低い数値であった。ラオスは、忍耐力、闘争心、自信、決断力、予測力、判断力、協調性の 12 下位尺度中 7 下位尺度において高い数値であった。しかしながら、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力の 5 下位尺度において低い数値であった。北マリアナ諸島は、自信、決断力、予測力、判断力の 12 下位尺度中 4 下位尺度において高い数値であった。しかしながら、忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、協調性の 8 下位尺度において低い数値であった。

また、3 か国における DIPCA.3 の 12 下位尺度の頻度の比較では、忍耐力、闘争力、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性に主効果が認められた。

カンボジアは、ラオスと比較して、勝利意欲 ($F(2.43) = 31.10, p < 0.05$)、自己コントロール

能力 ($F(2.43) = 6.84, p < 0.05$)、リラックス能力 ($F(2.43) = 5.09, p < 0.05$)、自信 ($F(2.43) = 12.76, p < 0.05$)、判断力 ($F(2.43) = 8.23, p < 0.05$) が有意に高値であった。また、北マリアナ諸島と比較して、忍耐力 ($F(2.43) = 3.62, p < 0.05$)、闘争力 ($F(2.43) = 5.23, p < 0.05$)、自己実現意欲 ($F(2.43) = 5.78, p < 0.05$)、勝利意欲 ($F(2.43) = 31.10, p < 0.05$)、自己コントロール能力 ($F(2.43) = 6.84, p < 0.05$)、リラックス能力 ($F(2.43) = 5.09, p < 0.05$)、自信 ($F(2.43) = 12.76, p < 0.05$)、決断力 ($F(2.43) = 5.98, p < 0.05$)、予測力 ($F(2.43) = 5.96, p < 0.05$)、判断力 ($F(2.43) = 8.23, p < 0.05$)、協調性 ($F(2.43) = 9.37, p < 0.05$) が有意に高値であった。

ラオスは、カンボジアと比較して、有意に高値な差は見られなかった。また、北マリアナ諸島と比較して、闘争力 ($F(2.43) = 5.23, p < 0.05$)、勝利意欲 ($F(2.43) = 31.10, p < 0.05$)、決断力 ($F(2.43) = 5.98, p < 0.05$)、協調性 ($F(2.43) = 9.37, p < 0.05$) が有意に高値であった。

北マリアナ諸島は、他国と比較して有意に高値な差は見られなかった。

4. 考察

1) JFA フィジカル測定の分析

日本の 2004 年度フィジカルデータ測定報告 (JFA, 2004) と 3 か国の同年代の平均値と比較した結果、日本よりもロングキック右足 1 ステップ、ロングキック右足フリー、ロングキック 左足 1 ステップ、ロングキック左足フ

表 2 DIPCA3 分析結果

(LAO=ラオス・CAM=カンボジア・北マリアナ諸島=MNP)

	カンボジア (n=15)	ラオス (n=17)	北マリアナ諸島 (n=14)	F 値	川崎F (n=55)	多重比較結果
忍耐力	17.20±3.75	16.41±2.40	14.43±2.18	3.62 *	14.90±2.66	CAM>MNP
闘争心	18.07±1.34	18.12±1.90	15.86±3.01	5.23 *	17.50±2.56	LAO>NHI CAM>MNP
自己実現意欲	17.80±1.74	17.00±1.90	15.29±2.43	5.78 *	17.40±1.95	CAM>MNP
勝利意欲	18.93±1.34	16.00±2.74	12.64±2.02	31.10 *	16.20±2.18	LAO>MNP CAM>LAO CAM>MNP
自己コントロール能力	12.07±2.05	9.94±2.79	8.93±2.02	6.84 *	14.60±2.22	CAM>LAO CAM>MNP
リラックス能力	12.07±3.71	8.94±2.82	9.00±2.63	5.09 *	14.10±3.73	CAM>LAO CAM>MNP
集中力	11.80±3.93	10.94±3.80	9.07±2.40	2.31 n.s.	15.40±2.48	
自信	18.73±1.39	15.88±3.02	14.57±1.99	12.76 *	14.0±3.24	CAM>LAO CAM>MNP
決断力	16.20±1.90	15.76±2.77	13.50±1.87	5.98 *	13.40±2.91	LAO>MNP CAM>MNP
予測力	15.87±1.73	14.35±2.37	13.21±2.05	5.96 *	12.60±2.67	CAM>MNP
判断力	15.93±1.28	13.65±2.81	12.57±2.44	8.23 *	12.50±3.10	CAM>LAO CAM>MNP
協調性	17.87±1.64	18.24±2.08	15.36±2.13	9.37 *	16.50±2.44	LAO>NHI CAM>MNP

*: $p < 0.05$, n.s.=not significant 【注】川崎F:川崎フロンターレ

リー、スローインが全体的に低いことが明らかになった。ラオスでは、学校単位での部活やチームはなく、Laoリーグに所属している選手が数人いるだけである（JFA, 2014a）。北マリアナ諸島でも、クラブ独自のトレーニングは少ない（JFA, 2015）。また、松山（2013）はブータン U-19 代表年代においても、育成年代ですでに習得しておかなくてはならない技術が低かったため、トレーニング全体の 14.0% を行ったと述べている。このことから、指導者による継続的なトレーニングの実施ができなかったために主にキック力が日本と比較して低いと考えられる。松山ら（2016）のカンボジアの研究では、継続的に地道に取り組むことによって、競技力向上に繋がっていくと考えられると述べている。したがって、3か国は、キック力に関して、指導者による継続的なトレーニングを実施する必要があると考えられる。

また、3か国による JFA フィジカル測定 14 種目の頻度の比較から、カンボジアは他国と比較して、シャトルランやアジリティステップ 50 などのアジリティの能力が高かった。しかしながら、カンボジアは他国と比較して、ロングキック右足 1 ステップ、ロングキック右足フリー、ロングキック 左足 1 ステップ、スローインなどキック力やスローインの能力が低かった。アジリティに関して、就任当初、カンボジアフットボールアカデミー・U-15 カンボジア代表監督である壺岐友輔氏（以下：壺岐監督とする）によると、「シャトルランやアジリティなどの能力に秀でている。」と述べている（オークン・オークン・カンボジア, online）。しかしながら、松山ら（2016）は、「カンボジアは、継続的なトレーニングを実施していかなかったため、全体的にフィジカルの要素が低かった。」と述べている。このことから、カンボジアは、シャトルランやアジリティなどの能力が高いが、継続したトレーニングを行っていないため、キック力やスローインの能力が低かったと考えられる。

ラオスは他国と比較して、50m 走などのス

ピード、左足のキック力に加え、バウンディング、片足ホッピングなどのジャンプ力が高かった。しかしながら、ラオスは他国と比較して、アジリティフォワードの能力が低かったと考えられる。

ラオス技術委員長に赴任した関口潔氏（以下：関口氏とする）は、「ラオスのサッカーは盛んであり、キック力に加え、動きが俊敏でボールタッチが繊細で、同年代の日本人選手よりも優れていると感じさせる選手も数多くいる。これは、友達との遊びを通じて、本能的に身に付けたもので、決して指導者に教えてもらったわけではない。」と述べている（JFA, 2014a）。このことから、サッカーというスポーツは、ラオス全国的に普及していると考えられる。しかしながら、ラオスの選手は、ゲーム展開を感じ、状況を観て動きを変えていくアジリティなどが苦手である（JFA, 2014b）。したがって、ラオス選手のフィジカル能力は高い選手が多く存在しているが、状況に応じて動きを変化させることが課題であると考えられる。

北マリアナ諸島は他国と比較して、シャトルラン、バウンディング両足の能力が低かった。北マリアナ諸島サッカー連盟は、2009 年に AFC に準加盟した新しい協会であり、サッカー経験者が少なく、経済的に恵まれた家庭の子供でしか、サッカーが出来ない現状である（JFA, 2015）。また、北マリアナ諸島の選手は、恵まれた体格をしており、非常に身体能力が高いものの（海外レポート, 山中 亮, online）、個々の技術レベルが低い（関口, 2016）。このことから、北マリアナ諸島は、身体能力が高い選手が多いものの、サッカー経験者が少ないため、個々の技術レベルが低く、サッカーに即したフィジカルの要素が備わっていないと考えられる。

2) DIPCA.3 の分析

大嶽ら（2003）による DIPCA.3 の研究結果と 3か国の同年代の平均値で比較した結果、日本よりも自信、決断力、予測力、判断力が高く、自己コントロール能力、リラックス能力、

集中力が低いことが明らかになった。

しかしながら、壱岐監督は、FIFA ランキング中位群であるカンボジアは、選手たちは自国のサッカーに自信を持ってないと述べている(松山ら, 2016)。松山ら(2015a)のJFAアジア貢献事業での育成年代選手の競技力に関する実態調査の研究結果から、心理的観点での「いつでも、自信をもってプレーする」の得点は上位群が下位群や中位群より有意に高値であったことから、選手の「自信」の値が高い結果になったのは、一過性のものだと考えられる。また、松山ら(2014)によると、育成年代からの国際大会の経験が少なく、トレーニングを継続して実施してなかったと述べている。このことから、3か国の同年代の選手は、日本と比較して、継続的なトレーニングの実施や国際大会の経験が少なく、気持ちの切り替え、冷静さといった自分自身を管理する自己コントロール能力、不安、プレッシャー、緊張のない精神的なリラックス能力、落ち着き、冷静さ、注意の集中力の値が低い結果になったと考えられる。

また、3か国によるDIPCA.3の12下位尺度の頻度の比較から、カンボジアは他国と比較して、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、自信、判断力が高かった。また、カンボジアは、他国と比較して、有意に低値な差は見られなかった。このことから、カンボジアの選手は、東南アジアチャンピオンを目指す「10年計画」がスタートし、選手のモチベーションが非常に高く、勝ちたい気持ち、負けず嫌いで勝利意欲、気持ちの切り替え、冷静さといった自分自身を管理する自己コントロール、不安・プレッシャー・緊張のない精神的なリラックス能力、目標達成への自信、的確、冷静な判断力などがより高い得点を示したと考えられる(日本とアジアを繋ぐフットボールマガジン, online)。

ラオスは他国と比較して、有意な差は見られなかった。JICA 青年海外協力日本人初のサッカー指導者の本間圭氏は、ラオス代表のプレーを高く評価する一方、すぐに諦める精神的な

弱さが見られる。また、試合中に自分で判断することを苦手としていると述べている(本間圭, online)。また、ラオス代表監督の木村浩吉氏も、潜在能力は高いが、すぐに諦め、規律に欠ける面があったと述べている(JFA, 2013c)。このことから、ラオスは他国と比較して、有意な差は見られなかったが、潜在能力が高いものの、すぐに諦める精神的な弱さと判断力や規律に欠ける面があると考えられる。

北マリアナ諸島は他国と比較して、闘争心、勝利意欲、決断力、協調性の能力が低かった。

北マリアナ諸島のゴールキーパーを短期間指導した山中 亮氏は、基本的な技術や戦術については、初めて耳にすることがほとんどであるようで、非常に興味深く取り組んでくれたと述べている(海外レポート, 山中 亮, online)。しかし、2010年からサッカー北マリアナ諸島代表監督に就任した関口潔監督(以下: 関口監督とする)は、彼らの辞書には、「時間厳守」、「規律」、「集中力」、「予測」といった言葉はないと述べている。例えば、試合中での瞬時の決断力、また、試合で勝利するために必要な闘争心、勝利意欲、チームの為に協力する協調性などが欠けているという(北マリアナ諸島サッカー代表監督の日記, online)。このことから、北マリアナ諸島は、サッカーに対する興味があるものの、経験者が少なく、サッカーに必要な心理面が低いと考えられる。

以上のことから、JFA フィジカル測定において中位群は、下位群と比較して、シャトルランやアジリティステップ50などのアジリティの能力が高かった。また、下位群は、中位群と比較して、キック力の能力が高かった。DIPCA.3において、中位群は、下位群と比較して、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、自信、決断力の能力が高かった。しかしながら、日本と比較した場合、JFA フィジカル測定やDIPCA.3の能力が低かった。したがって、3か国が競技力を向上させるために指導者による継続的なトレーニングの実施や国際大会の経験を積む必要がある。

5. まとめ

本研究では海外派遣サッカー指導者が指導する中位群のカンボジアと下位群のラオス、北マリアナ諸島の選手の競技力に関するJFAフィジカル測定やDIPCA.3の比較を行うことを目的とした。その結果、以下のことが明らかになった。

1) カンボジアは他国と比較して、JFA フィジカル測定のシャトルランやアジリティステップ50などのアジリティの能力が高かった。しかしながら、キック力やスローインの能力が低かった。また、DIPCA.3は、勝利意欲、自己コントロール能力、リラクセス能力、自信、決断力の能力が高かった。

2) ラオスは他国と比較して、JFA フィジカル測定の50m走などのスピード、左足のキック力に加え、バウンディング、片足ホッピングなどのジャンプ力の能力が高かった。しかしながら、アジリティフォワードの能力が低かった。また、DIPCA.3は、有意に高値の差は見られなかったが、潜在能力が高いものの、すぐに諦める精神的な弱さと判断力や規律に欠ける面があると考えられた。

3) 北マリアナ諸島は他国と比較して、JFA フィジカル測定のシャトルラン、バウンディング両足の能力が低かった。また、DIPCA.3は、闘争心、勝利意欲、決断力、協調性の能力が低かった。

しかしながら、日本と比較した場合、JFA フィジカル測定やDIPCA.3の能力が低かった。したがって、3か国は、競技力を向上させるために指導者による継続的なトレーニングの実施や多くの国際大会の経験を積む必要がある。

文献

FIFA. RANKING.

<http://fifaranking.net/rankin/index.php?d=2014-04-10&rnkp=4>. (2015年9月10日参照)

本間圭 http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hakusyo/13_hakusho_pdf/

pdfs/13_c09.pdf#search='JICA%E3%83%A9%E3%82%AA%E3%82%B9%E3%82%B5%E3%83%83%E3%82%AB%E3%83%BC%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%80%85' (2016年8月6日参照)

JFA. <http://www.jfa.jp/>. (2015年3月20日参照)

JFA (2004) 2004年度フィジカルデータ測定報告. アサヒビジネス (株): 東京, pp. 26-27.

JFA (2006) JFA フィジカルガイドライン. アサヒビジネス (株): 東京, pp. 30-55.

JFA (2013a) JFA PLOFILE. JFA 機関紙: 東京, pp. 1-26.

JFA (2013b) Technical news, Vol. 58. サンメッセ: 東京, p. 43.

JFA (2013c) JFA news, No. 351. サンメッセ: 東京, pp. 32-33.

JFA (2014a) Technical news, Vol. 60. サンメッセ: 東京, pp. 42-43.

JFA (2014b) Technical news, Vol. 61. サンメッセ: 東京, pp. 42-43.

JFA (2015) Technical news, Vol. 67. サンメッセ: 東京, pp. 42-43.

海外レポート, 山中亮.

<http://www.jfa.or.jp/jfa/international/dispatch/report/yamanaka.html>.

(2015年11月1日参照)

北マリアナ諸島サッカー代表監督の日記.

<http://ameblo.jp/kiyoshi-sekiguchi/entry-10853053853.html>. (2016年6月2日参照)

松山博明 (2013) ブータン王国サッカーのコーチングに関する調査研究～U-19代表チームにおける強化トレーニング内容の観点から～. 大阪体育学研究, P.28.

松山博明, 土屋裕陸, 堀野博幸, 須田芳正 (2014) 海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題 -JFA アジア貢献事業ブータン王国サッカーの実践活動を中心に-. 大阪体育学研究, Vol. 52, pp. 15-22.

Hiroaki Matsuyama, Takahiro Matsutake, Hiroyuki Horino, Hironobu Tsuchiya

- (2015a) Competitiveness of Young Football Players in the Japan Football Association Social Action Program. *Advances in Physical Education*, 94-102.
- 松山博明, 土屋裕陸 (2015b) 海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題 - アジア貢献事業 ブータン王国サッカー U-19 アジア選手権の実践活動を中心に -. *スポーツ産業学研究*, Vol. 25, No. 1, 111-122.
- 松山博明, 松竹貴大, 土屋裕陸 (2016) アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究 - カンボジアフットボールアカデミー選手の実態調査から -. *大阪体育学研究*, Vol. 54, 3-13.
- 日本とアジアを繋ぐフットボールマガジン.
<http://aseanfootball.biz/Detail.php?id=39>.
(2015年10月27日参照)
- オークン・オークン・カンボジア.
<http://ameblo.jp/2014boasorte/entry-11956704626.html>. (2015年10月16日参照)
- 大嶽真人, 須田芳正, 植田史生, 石手靖, 依田珠江, 古賀初, 田中博史 (2003) ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力について. *慶應義塾大学体育研究所紀要*, Vol. 42, No. 1, 1-7.
- 関口潔 (2016) サッカー批評. 双葉社: 東京, pp. 64-69.
- 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 高柳茂美 (1991) スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発. *デサントスポーツ科学*, Vol. 12, 178 - 190.
- (平成28年7月14日受付, 平成28年11月8日受理)